

素 顔 拝 見



特任助教
(組織再建口腔外科学分野)

船 山 昭 典

はじめまして。2011年4月より、特任助教に採用いただきました、組織再建口腔外科学分野（口腔再建外科）の船山です。2003年3月に本学を卒業し、同年4月に大学院生として、組織再建口腔外科学分野の大学院に入局し、2007年3月に卒業し現在まで口腔再建外科で仕事をしてきました。出身は秋田県能代市です。新潟からは、かなり北に位置しておりますが、日本海に面した平野ということもあり基本的には同じような天候で、冬の曇天に直面する暮らしが、出生時から現在のところ継続中です。新潟市までは、車か特急「いなほ」での移動になります。私が新潟大学に入学した頃は、日本海沿岸東北自動車道が全く開通していない時代でしたので、車では7～8時間、部分開通した現在でも、5時間程度はかかります。特急ではどうかというと、基本的には5時間30分ではありますが、脱線事故の影響によるさらなる安全運転の徹底で、風雪の強い冬は日常的な遅延または運休、7、8月は局所的豪雨による、思いがけない列車の遅れなど、日本海側での生活には何かと忍耐力が必要であります。

学生時代は、野球部に所属しました。ちょうど再建外科の同期である小島先生や、1学年後輩の長谷部先生も一緒に野球をしていました。デンタル大会には参加せず、新潟地区大学軟式野球連盟に所属し、春・秋のリーグ戦をおこない一位が全国大会に出場できるというリーグ戦です。1、2年の頃は非常に弱く、いつもコールド負けを喫していました。2時間30分の試合時間制限のうち、2時間くらいは守備をしているんじゃないかと錯

覚してしまうような状態でした（もしかしたら、実際そうだったのかもしれませんが）当時の主将が対戦相手の主将に「もうやめませんか……」みたいなことを言われたこともあったようです。それでも、一生懸命に練習し、余裕で負けていた相手に勝利し、5年、6年生の時は、全国大会に出場できたことが非常にいい思い出です。歯学部ソフトボール大会には、口腔再建外科チームも参加していますが、まったく練習できない状況と、年齢からくる動体視力の低下により、グローブにはボールが当たるが、とれない（＝球際に弱い）という失態です。それでも、みんなで楽しく参加しており、昨年、黒船で入港しドラフト一位で入団した悪球打ち大リーガーの活躍で、決勝まで進出しました。

大学院1年目は口腔外科の基礎を身につけるため臨床を経験しました。3ヶ月の外来研修、4ヶ月間の手術室での麻酔管理、5ヶ月間の病棟研修をおこないました。口腔外科医としての基礎と歯科医としての心構えを先輩から教えていただきました。齊藤教授、新垣准教授にお願いし、大学院2年目からは口腔病理学分野の朔教授の教室で、異型上皮一上皮内癌一初期浸潤癌における微小血管、リンパ管、粘膜下の線維化、ポドプラニンの発現様式などについて研究させていただきました。最初の試練はミクロトームによるパラフィン切片の薄切でした。これをパスしないと研究材料を扱うことは許されないのも、必死に練習しましたが、約4ヶ月～5ヶ月間を要した気がします。ちょうど同時期、医歯学総合病院入院棟の建築が進んでおり、薄切時に正面に見えるような実験室の配置でした。1学年先輩の顎顔面外科学分野の小林先生が一足先に口腔病理学で研究されており、重要なアドバイスをいつもしてくれて、病理での研究生活を円形脱毛なしに乗り切れたと思っています。大学院卒業後は、医局の関連病院である富山県立中央病院歯科口腔外科に1年間出向

いたしました。病院自体は、新大病院と同じ規模であり、歯科医師は自分も含め3人体制でした。非常に患者数、手術症例も多く、臨床医としての出発点となったと思います。大学に戻ってからは3年間外来で教授係をさせてもらい、口腔外科一般、特に、顎変形症の治療について教授から直接的にもご指導いただき、自分の未熟さを自覚するばかりでありました。現在は、外来では、新垣准教授にご指導いただいております。研究テーマでもある、口腔癌の患者様のため、形態と機能の回復を基本とした高齢の患者様にも配慮したやさしい医療を提供できればと思っております。今後は、研究・臨床・教育をバランスよく頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

*

特任助教(予防歯科学分野)

石田陽子



2011年6月1日より、予防歯科学分野において特任助教を拝命しました、石田陽子と申します。こんな風を書くともまるで「初めまして」のようですが、恥ずかしながらこの「素顔拝見」に寄稿するのは2度目です。

私は本学歯学部歯学科を卒業後、歯科補綴学第一教室(現・包括歯科補綴学)に大学院生として進学し、学位研究は口腔生化学で行い、修了後はそのまま研究先の口腔生化学で2年6ヶ月間、助手(当時の呼称)として勤務しておりました。

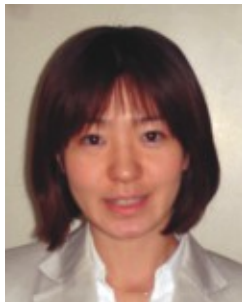
表現が過去形なのはそこで一度退職したためです。海外留学願望が募り、短期の語学研修でもいいからと思い、退職してすぐにカナダ西海岸に行

きました。と言ってもわずか4ヶ月程度の留学で、普通、大学教員ならば研究留学という形で海外の大学や研究所に行くのですが、どちらかという一般的な英語のbrushupをしたかったので、若い学生さんたちが通っているような語学学校に通いました。初めの1ヶ月滞在したカナダのヴィクトリアという町(写真)で通った学校は、すでに30歳を過ぎていた私は珍しがられましたが(逆に60歳くらいの女性がいたりしました)、若い気分で楽しむことができました。あとの3ヶ月はバンクーバーで、そこでは医療英語を教えてくれる学校に通いました。こちらは生徒が少なく、3-4人程度だったうえに全員が日本人でしたが、医師・薬剤師・看護師等の医療従事者ばかりだったので、授業以外の日本語での会話も情報交換になりました。その学校では現地の病院見学ができることが特長のひとつでしたが、歯科医師が入学してくることはあまりなかったようで、もともとの見学先リストに歯科というのはなかったにもかかわらず、歯科医院の見学を私一人のためにアレンジしてくれました。なんと学校のオーナーが自ら初診患者になっているところを私に見学させてくれるとのことで、受付から問診を受けているところまで見せてもらうことができました。その医院で驚いたのは治療そのものというより、受付担当者が電話で完璧な問診に近い会話をしていること、さらに驚いたのはスケーリングを希望して電話をかけてきた患者様に「担当歯科衛生士は男性と女性、どちらがいいですか?」と聞いていたことです! 「男性の歯科衛生士がいるの!?!」と思いましたが、当時は口腔生命福祉学科ができて間もない頃だったので、いずれ本学からも男性衛生士の活躍が見られるんだろうなあと新潟に想いを馳せておりました。他には、唇顎口蓋裂の患者様も治療を受けている矯正歯科医院にお邪魔し、こちらはノースバンクーバーの景色が外壁ガラスを通して見えて、本当に綺麗でした。さらにもう1ヶ所、個人的につてを探して見学した一般歯科の医院では、中東出身の院長と韓国系の若いDrが診療していたのですが、どうやら勤務医という感覚ではなく、医院のチェアを2台間借りして開業しているといったような形態でした。英語力がおよ

ばず質問しきれませんでした。日本で言う勤務医と違うのは、受付担当者が医院の財務担当もしていて、院長・勤務医それぞれの収支を計算して報酬を出してくれるシステムだったようです。休みもそれぞれで、院長は毎週金曜日にはブリティッシュ・コロンビア大学に行ってやりたい勉強をしているという環境が非常に羨ましく思えました。

帰国後は4年あまり、新潟県内外で勤務医をしておりました。勤務医生活も初めはドキドキハラハラものでしたが、いつの間にか度胸も付き、心身ともに？ 一回り大きくなってしまいました。そしてこの春に「国際イニシアティブ人材育成プログラム」の特任助教にならないか、と予防歯科学の宮崎教授からお声をかけていただき、大学院生教育に関われるなら、とお引き受けしました。退職して長く経っている身に声をかけていただいたことには恐縮でしたが、短期語学研修も勤務医経験も後輩たちの何かの役に立つのでは、と前向きに考えております。どうぞよろしく願いいたします。

*



助教
(生体歯科補綴学分野)

長 澤 麻沙子

みなさん、こんにちは。生体歯科補綴学分野の長澤麻沙子と申します。平成23年6月より当分野の助教を務めさせていただいております。

私は東京で生まれ、小学校中学年より高校まで父の実家である長野で育ちました。大学は新潟大学歯学部出身で新潟に来てから今年で13年目となります。入学したときの自分は、まさかこんなにも長く新潟にいるとは思っていませんでした。というのも、新潟に来た当初は長野とは違う天気(冬の曇天と暴風、夏の湿気)に驚き、一刻も早く脱出？ したいと心から思っていたからです。しかしながら月日を重ねるごとに新潟のよさ(食べ物

と日本酒)に触れ、多くの人と出会い、今をこうして迎えています。

さて、13年間の新潟での生活を簡単にお話させていただきます。学生時代はバスケットボール部とスキー部に所属しておりました。とにかく体を動かすことが好きで仕方がなかったのですが、今はその面影は全くありません。心身ともに健康であるためにも運動しないと、と思う今日この頃です。大学の授業は……講義も実習もきちんと参加していました。またSCRIP(Student clinician research programの略: 学生が研究をし、その成果を英語で発表する全国大会)との出会いは大きく、熱心にご指導くださる多くの先生方にとっても感動したのを覚えています。また私は旅行が好きで、全国津々浦々、旅して回っていたのもこの頃です。日本って面白いところだなあ、と思いつつ、酒蔵めぐりをして、作り手さんたちと日本酒を語り合う毎日でした。

私の時代は研修医制度が始まる前の年でしたが、卒後の2年間は歯科総合診療部(以下、総診)で研修をさせていただきました。卒業後の数年間は今後の歯科医師人生にとって重要な位置を占める、と言われていますが、私は総診で研修ができて本当に良かったと思っています。専門診療室に在籍する私が言うのもなんですが、新潟大学の総診は素晴らしい研修場所だと思っています。

研修が終わりを迎える頃、今後の進路に関して当時、総診の部長であった魚島教授にご相談したところ、大学院生として魚島教授にご指導頂き、口腔解剖学講座の前田教授のところへ研究させて頂くこととなりました。この4年間は「私死んじゃうかも」と思った時も多々ありましたが、優しい後輩たちがグチを聞いてくれたおかげで何とか乗り越えることができました。今の講座におりますのは、魚島教授が生体歯科補綴学講座の教授に就任されたのを機に、私も異動したためです。本文冒頭でさらりと助教を〜と書きましたが、本人としましてはかなりおなかの痛い話でありまして、今の私にできる事は何だろうと考え、とにかく与えられたことを精一杯やろう、と思っている毎日です。教えられる立場から教える立場となり、教育の重要性と責任感をひしひしと感じています。

私は大学にいる歯科医師として臨床・研究・教育どれもおろそかにするつもりはありません。言うほど簡単でないこともわかります。しかし、臨床家の発想による研究こそ、我々の責務と思うようになりましたし、これからの日本を支えるのは教育ですから、かなりやりがいのある仕事です。また、臨床を通して患者様に医療を提供できる仕事は大変ですが、とても楽しいと思っています。学生時代に熱心にご指導くださった先生方に報えるよう、この先生ってすごいなあ、と尊敬する先生方に少しでも近づけるよう、研鑽していく所存であります。これからもどうぞよろしくお願い致します。

*



准教授
(福祉学講座)

島田久幸

平成22年4月から口腔生命福祉学科でお世話になっております。採用前は、新潟県職員（福祉行政職）として22年間、福祉事務所、児童相談所、障害福祉施設の現場で相談・支援業務に従事し、また、本庁（福祉保健部障害福祉課）において障害者自立支援法の施行、県立施設の見直しといった仕事に携わってきました。振り返ると「児童虐待」「地方分権」「社会福祉基礎構造改革」「民営化」「地域生活移行」などといったその時々の課題に追われ、ただ走り続けてきたようにも思います。

現場から離れて社会福祉の世界を眺めると、よく指摘されていることですが、やはり実践（現場）と理論の乖離を感じます。懸命に走り続けている現場は、理論を検証すること、理論を構築することができていません。それ以前に、理論を十分に学べていないし、望ましい社会福祉（政策・制度・援助）の在り方を提言するという姿勢に欠けているのかも知れません。そしてこの問題は、学生に社会福祉をどのように教えるのかという、私自身の課題として返ってきています。教育に、研

究に、実践（臨床）にと、日々フル稼働されている先生方と一緒にさせていただき、実感できたことです。

さて、「素顔」ということですので、家族は妻と娘との3人です。出身は新潟市の真ん中（中央区）で、また、ほとんど新潟市から出たことがありません。県職員になって最初の2年間佐渡市（旧相川町）に住んだほかは、ずっと新潟市内に住んでいます。大学も本学の人文学部行動科学課程卒業です。

専攻が心理学でしたので、児童相談所の心理判定員という漠としたイメージで県職員になったのですが、その職に付いたことはなく、略歴は冒頭のとおりです。家庭や地域から弾かれて問題行動を繰り返す子ども、意に反して何年も施設での入所生活を続け二次障害を呈したり、パワーレス状態になったりしている障害者、数え切れないほど多くの方々と出会いました。その中で、それら利用者（クライアント）の方に対する指導・訓練といったアプローチの限界性と環境・社会に対するアプローチの重要性を体感し、社会福祉（学）を志向するようになりました。

話が戻ったようになりましたが、趣味はスポーツでしょうか。中学校から大学、そして県庁（実業団）と、結構本格的にバドミントンをやっていました。しかし、仕事が忙しく徐々に体育館から足が遠のくうちに、長年の無理か、長時間の残業か、単に「歳」か、原因は分かりませんが、腰の調子も悪くなり、いつかやろうと思いつつ、久しく羽を打っていません。最近は観戦専門、しかも何かやったこともないサッカーが好きになりました。ルールがシンプルで、ポジションはあるけれど流動的。瞬時の直感で判断し、それほど多くは生まれたいゴールを信じて、全力でピッチを駆け回る。何か共感するものがあります。なでしこジャパンの優勝には、一人早朝から涙してしまいました。

最後に、口腔生命福祉学科に来て率直に感じていることは、ダブルライセンスを目指しているのが当たり前と言えそれまでですが、「学生は本当に忙しく、よく頑張っている」ということです。これだけ頑張っているのですから、是非国家資格

は取ってほしいと強く願っていますし、学科創設の理念を体現する学生が多く生まれていくことを期待しています。社会福祉分野の私が歯学部勤めることになることは、正に「縁」だと思っています。この縁を大切に、歯学部の発展のために尽力したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

＊

グローバルイゼーション



講師
(予防歯科学分野)

小川 祐 司

こんにちは、予防歯科の小川祐司です。私の名前をおがわゆうじとお思いの方もいらっしゃると思いますが、おがわひろしと読みます。ひろしとフリガナをつけると裕司と漢字を間違われることもあり、自分の名前を間違えず読んで書いていただくとプチ感動です。まあ最近ではおがわゆうじでも気にならなくなってはきましたが……。

新潟に来て大学院時代を含め15年近くになりました。日本大学松戸歯学部を卒業後、シドニー大学にて歯科公衆衛生の修士を履修し、その後大学の博士課程で予防歯科を専攻して以来です。2003年世界保健機関(WHO)口腔保健部にて研修する機会を得、以降国際口腔保健に関する実務が多くなり、2007年には日本初の口腔保健に関するWHO 協力センターに予防歯科学分野が認証、学内でもコアステーション・国際口腔保健教育研究センターが附置されると国際口腔保健活動への基盤整備が大きく進みました。グローバル化が叫ばれる昨今、国際口腔保健分野に携われることはタイムリーと考えますが、その成果の形成は簡単なものでなく、地味で手間を要するものばかりです。幸い、WHO インターンシップや海外フィールド活動を通じて国際口腔保健に興味をもつ後輩諸兄が力を付けてきており、自分を含め彼らの力をど

のようにアカデミックな側面を付加しながら発展させていくかが今後の大きな課題と考えています。ということで、私の職務の大方は対外的な内容が多く、海外に出での活動を可能にさせていただいている医局の同僚や学部・病院のみなさまのご配慮には常日頃感謝しております。

さて、海外に出る機会が多くなればなるほど自分が日本人であることを痛感し、一種のナショナリズムを覚えるようになってきました。留学時代はとにかく英語というスタンスで日常生活もできるだけ英語に置き換えようとあえて日本人であることを隠すかのような行動をしたりもしました。しかし、最近はむしろ日本人を前面に押し出して日本の美しい文化や美徳のこころを理解してもらいながら仕事を進めていきたいと感じます。インターネットの普及でボーダーレス化が進む中であっても、日本はまだまだ遠い知らない国であることが多々です。国際的リーダーシップを発揮すべき機会があっても、中国や韓国の強力な国際政策に圧され日本の国力(ブランド)がどんどん低下しているのは残念なことです。WHO など国連機関においてもその様相はここ数年顕著で、グローバルイゼーションに乗り遅れて水をあけられてしまったと言わざるを得ません。

このような状況下で大学に目を向けたとき、私のこれからの使命は、学部・大学院教育において国際的なセンスとともに実践的な力を兼ね備えた人材の育成と考えております。強いリーダーシップと感性豊かな人柄の両輪は人を惹きつける大きな原動力です。学生になるべく早い時期から海外を経験して、語学力の重要性だけでなく世界は広い(可能性はいくらでも広がる)ことに気付いてもらい、大きな視野をもって能動的な学習教育が行える環境づくりを目指していきたいと思えます。これらは微力で出来ることではなく、大きな力が必要です。縦割りの垣根を超えてみなさまと共に前に進んでいきたいと考えております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

＊

医歯学総合病院講師
(摂食・嚥下リハビリテーション学分野)

谷口裕重

摂食・嚥下リハビリテーション学分野の谷口裕重と申します。今回は素顔紹介ということで原稿依頼を頂きましたので、少しでもおつきあい下さい。

私は愛知県出身です。生まれてから愛知学院大学歯学部を卒業するまで名古屋で過ごしました。家が歯科開業医だったということもあり、大学までは特に疑問を抱かず進んできましたが、歯学部卒業時に真剣にその後の進路について考えました。その時、新潟大学で積極的に取り組まれていた摂食・嚥下という分野に出会い、初めて自ら学びたいという意欲を持って新潟大学へお世話になることになりました。初めて新潟大学に来た日は忘れません。現在は副学長をされている山田好秋教授に「今日からこの先生について勉強しなさい」といって紹介されたのが現在のボス井上誠教授でした。

『……やくざ!? 迫力あるな……』私の第一印象です。そして最初に与えられた席は目の前が壁、すぐ後ろに井上先生という何とも圧迫感のある環境で毎日生きた心地がしなかったのを覚えています。

今考えると井上教授も私を見て『こいつ何しに来たんだ。何にもできなさそうだな。』という印象を持たれていたのだらうと思います。

その通り何にもわからない出来の悪い私でしたが、新潟にきて早8年が経ちました。今まで医局から放り出される事なくやってこれたのは、ひとえに諸先生方の忍耐力だと思いますが、中高と部活でバレーボールに明け暮れ学んだことは少なからず役に立っていると思います。当時の部活はスパルタが主流で毎日鬼のようにしごかれて、今では流行らない「根性」をたたきこまれました(水も一定量しか飲むことを許されず、こっそりとトイレの水を飲んでた記憶があります)。そのおかげで少々のことではへこたれない精神が身に付きました(いいかえると鈍感というのかもしれませんが)。妻には「なんでそんなにへらへらしてるの? 悩みなさそうでいいね。」と言われます。

と有意義な学生時代を過ごしてきましたと締め



筆者は前列右から2番目

たいところですが、その後の大学生活は酒か遊びかバイトの毎日でした。夏休み、冬休みは必ず海外に行きました。海外といっても全て物価の安いアジアですが。バイトで稼いだお金と格安航空券を持ち、リュックを背負って(いわゆるバックパッカーというやつです) フィリピン、インド、マレーシア、シンガポール、中国、韓国、タイ。特に気候がよく人が優しいタイが気に入り何度も行きました。最初にタイに行ったのは20歳の時で、初回でいきなりカードゲームの詐欺にひっかかりました。ぎりぎりのところであやしいと気付いた友人に助けられました。次の年から「地球の歩き方」に「この詐欺にひっかかったら、命の保証はできません」なんて書いてありました。

いい加減な学生時代を過ごしてきましたが、摂食・嚥下リハビリテーション学に出会ってからは、その奥深さと学ぶことの楽しさに魅了され、知識と技術を得るため必死に走ってきたつもりです。摂食・嚥下リハビリテーション学分野は、人間が生きていくために欠かせない「食」を考え、摂食・嚥下機能に障害を起こした場合でもいかにして栄養をとるかのみにでなく、最期まで口から食べる喜びを患者様と分かち合える大変やりがいのある分野です。未熟者の私を受け入れ、今も変わらず育ててくれる当教室の皆様はこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

若い歯科医師、歯科衛生士の皆さん、新潟大学摂食・嚥下リハビリテーション学教室は『食』を考えるプロフェッショナル集団です。私達と一緒にがんばってくれる人大歓迎します。

末筆ではありますが、今後も新潟大学医歯学総合病院、新潟大学歯学部のために尽力いたしますので諸先生方、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



助教
(顎顔面口腔外科学分野)

小山貴寛

こんにちは。2011年4月1日より顎顔面口腔外科学分野の助教を拝命いたしました小山貴寛です。

今回「素顔拝見」ということで原稿依頼があった時、何を書けばよいのかとまどってしまいました。あまり考えてばかりいても仕方がないということでなんとなく思いついたことを書いていきたいと思います。

平成13年に日本歯科大学新潟歯学部を卒業した後、顎顔面口腔外科学分野に大学院生として入局させて頂き、あれやこれやとしているうちに現在に至り、あっという間に（気が付いたら）卒後11年目となってしまいました。この間、多くの先輩先生方、後輩、同期の仲間達に支えられここまでこられたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。最近では大学に残っていた同期がひとり、またひとりと大学を退職していき、残りはわずかとなりさみしい限りです。近況としましては外来・病棟・手術室を歩き来しながら、時間を見つけて何とか研究を行っている毎日です。

出身ですが、生まれも育ちも新潟市です。現在まで長期出張に行かせていただいた1年間（村上市6ヶ月、群馬県沼田市6ヶ月）以外は、新潟市内でのみ生活をしていることになってしまいました。

現在一番面白い？と感じているのは、4歳になる長女と2歳になる次女の日々の成長です。日ごろ忙しく、あまり会えない（朝起きる前に自宅を出てしまい、帰ったらすでに寝てしまっている）ため、休日に時間を作れるときに急に出来なかったことができたりする場合など非常に驚かされます。現在良く聞かれる「育メン」とはほど遠く、

家族には迷惑をかけており頭が下がる思いです。しかしながら時間が取れる限りは、子育てを楽しんでいる（娘達に遊ばれている？）という状態です。

次は大学院時代の研究についてのお話をしたいと思います。大学院時代の研究テーマとしては凍結保存した後の口腔粘膜上皮細胞を用いた培養複合口腔粘膜を作ることができるのか、というものでした。研究のきっかけを与えてくださったのは、飯田明彦先生で「こんな研究テーマがあるんだけど、どう？」と言われ、「はい」と答えたことから始まりました。研究を始めるにあたり最初に挨拶に伺ったのは泉健次先生でした。所属教室は顎顔面外科、研究場所は口腔再建外科の実験室で行うという不思議な状況の始まりでした。しかしながら研究を始めたものの失敗ばかりしてしまい、ご迷惑しかかけないうちに泉先生がアメリカへ旅立ってしまいました。その後の研究に関しては芳澤享子先生に指導していただくようになり、日々何事（研究・臨床）においても、ついて行くだけで大変ということばかりの連続でした。大変であった分、なんとか無事に大学院時代の研究がまとめられたことは一つの自信になりました。所属は高木律男教授の顎顔面口腔外科（旧第2口腔外科）、研究場所が齊藤力教授の口腔再建外科（旧第1口腔外科）ということから、多くの先生方に「先生は1.5口外だね」と言ってもらえることができるようになり、両教室で何とかやってこれた証なのかなと実感できたと同時に、新潟大学の口腔外科に残ってよかったと感じられた瞬間でした。現在の研究も大学院時代の研究を継続し、凍結保存後の細胞を用いた培養複合口腔粘膜に関する研究を行い、臨床応用できればと思っております。

最後になりますが、臨床・教育の両面における技術、知識、経験など全ての面でまだまだ未熟ですが、皆様のお力をお借りしてさらなる研鑽に努めたいと思っておりますので、これからも宜しくお願いします。